第14章 日本語の構造

1 日本語教育のための日本語分析

日本語母語話者にとって、日本語は子どもの頃から「国語」として学び、日常的に慣れ親しんできた言語でしょう。そのため、「日本人なら日本語を教えられる」「日本人なら日本語のことをよく知っている」と考える人もいるかもしれません。しかし、日本語が使えることと日本語を教えることは違います。私たちが学んできた教科としての「国語」は、すでに運用能力のある日本語母語話者を対象とし、日常的に使用している日本語の仕組みや成り立ちを分析することを主な目的としています。一方、日本語教育は、非日本語母語話者を対象とし、**日本語の知識と運用能力**を身に付けることを主な目的としています。例えば文法の分野を見てみると、国語では品詞分類について学習するとき、「語は単独で意味をなす自立語と、単独で意味をなさない付属語に分けられる」と習います。しかし単独で意味をなすかどうかが感覚的にわかるのは、すでに日本語の運用能力がある母語話者だからであって、日本語学習者にとってその教え方は通用しません。そのため日本語教育では「自立語」や「付属語」といった概念は扱わず、別の観点からアプローチします。

音声の分野でも、日本語母語話者は日本語の発音の仕方を習って覚えたわけではありませんから、例えば「ツ」はどうやって発音するのかと聞かれても、上手く説明することができません。学習者に発音上の誤用が見られたとき、それを正すためにはまず私たちが日本語の発音の仕方について知っておく必要があるのです。

このように、日本語教育に携わる人には、日本語母語話者としてすでに運用している日本語から日本語教育のための日本語として、知識を整理し直すことが求められます。

Memo▶ 日本語教育文法で扱う品詞名は主に動詞、形容詞（イ形容詞・ナ形容詞）、名詞、副詞、接続詞。